

第2回体の動きを高める運動領域部会記録

参加者 畠中 河野 岡田 山本 関川 高橋 藤井 坪根 高岡 奥水 東 土屋 濱須 古川
満山 宮内 鈴木 戸澤 大川

I 自己評価の捉え方について

(I) 第3回正副長会資料

研修Ⅲ資料（体の動きを高める運動領域部会）

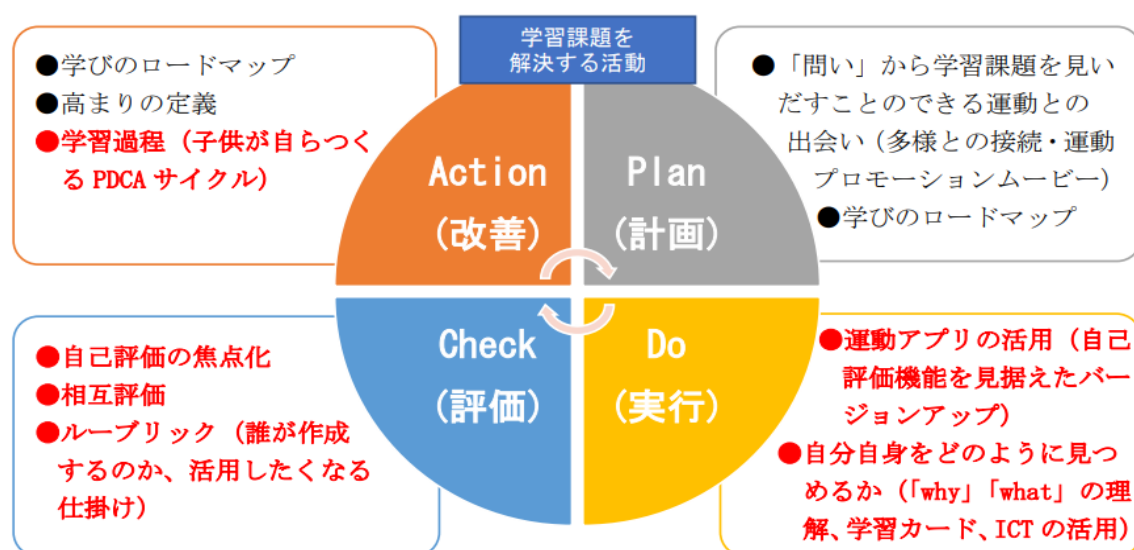
1 自己評価の力の捉え方～5W1Hに沿って～

When：いつ	Where：どこで	Who：誰が	What：何を	Why：なぜ	How：どのように
運動中、仲間との交流後、学習の最後 ※うまくいっている時、うまくいっていない時の双方		子供本人 (自己・仲間との対話、教師の働きかけを通して)	学習課題、運動の選択、体の動きの高まり、工夫の仕方、学び方	課題解決のため、子供本人が深い学びを実現するため、(子供自らがPDCAサイクルを回し続けるため)	仲間との対話、運動場面を撮影した動画、学習カード

※今後の部会で、「なぜ運動・自己評価をするのか」「何を運動・自己評価するのか」などの目的意識や必要感につながる疑問を明らかにすることが、子供が「する」自己評価活動につながる<u>と考える。子供自身が「なぜ?」と目的を問うことが「何を」と問題を見いだしていくことにつながる。

2 自己評価の力を高める手立ての工夫

本部会では、「メタ認知能力の高まり」が「自己評価の力の高まり」につながると仮定した。子どもが自らつくったPDCAサイクルを仮に下図と想定する。(Pから始まらずDCAPのような順序になることもある)それぞれの段階に沿って、自己評価の力を高めるための手立てや方向性を、これまでの研究の成果を踏まえて整理した。



※枠内赤字が「自己評価の力を高める手立て」として、今後部会で特に追究していきたいところである。

(2)「何を」「なぜ」について具体的な子供の姿を考える

グループ	「何を」について	「なぜ」について	その他
A	自らの運動の取り組み方 自らの高まりの実感 これならできそうだと思う対象について		「何を」も「なぜ」も子供たちの学習の段階（運動の出会いの場面、単元の終盤など）によって変わってくる。 比較できるものがあると自己評価しやすい。 仲間とのかかわり、教師とのかかわりの中で比較することで自己評価が促されるのではないか。
B	行い方 課題 問い 今の自分と今までの自分を比較する プロモーションビデオを見ることをきっかけに取り組み、「自分は何ができたのか?」「何ができなかったのか?」「自分はどうか?」「自分はどうか?」について自己評価していく。	キーワードとして、「必要感」があると考え。 ・より楽しく行うためには? ・体力を高めるためには? 自分の問いを解決するために自己評価する。	
C	数値 記録 自分の課題の達成度 自分の動き（自分の動きがかっこよくできているか） 情意面（友達と仲良くできた）や思考判断面（工夫）も自己評価の対象となる。	自分の成長のために自己評価する。 ↓（目的の変容） 自分の学習課題を解決するために自己評価する。 自分が運動している姿を振り返り次の学習につなぐため。	運動が得意な子と得意でない子とで自己評価をする力に差が出てくるのではないかと考えた。 動画で撮影して振り返る。
D		子供のリアルな姿として、先生が言っているから、友達がやっているからなどの受け身な姿も考えられる。 そこから「自分から○○したい」という理想的な姿に変容できるようにすることが大切。	子供は受け身になってしまうのではないか。 Why → What →How to の過程を大切にしたい。

(3) 「何を」「なぜ」について具体的な子供の姿を考えるについての話し合いを通して

今までは学習カードをつくって、「めあては意識したか?」「友達と仲良く運動できたか?」など評価の観点をもとに学習カードを作っていた記憶がある。めあてを書かなくても運動で意識していることはある。

毎回情意面を振り返りたいと思う子供たちがどれくらいいるのか?情意面を振り返りたいと思わない子供もいるはず。思考・判断・表現は取り組み方にかかわってくると思う。しかし、一番は運動にどのように取り組んだか振り返ると考える。

領域の特性によって、自己評価の捉え方は異なると思う。

最初は何となく運動をしている子も、単元の進展に伴い、自分の目的に合わせて運動を行うことができるようにしていくことが大切なので、学習課題をどのようにもつかが大切になると考える。学習課題をもとに自分から運動に取り組み、その課題解決の過程で自分の取組がどうであったか振り返り、次の課題をもつ姿が自己評価している姿なのではないか。

(4) 体の動きを高める運動領域における自己評価の捉え方について

単元を進める中でどのように育むか?

学習過程が大切!

どのような手立てを通して、子供が自己評価したいと思うか?

(5) 子供が自己評価したいと思う手立てについて

グループ	手立てについて話し合ったこと
A	ICTの活用が大切だが、ICTの使い方については、これから部会でどのように活用していくか話し合っていく必要がある。 どの場面で使うか、定点で撮影するのか、個人がもって撮影するのか。 「みんなができる運動」「易しい運動から始めることができる」などのもとの動きの設定も大切。
B	学習カードの在り方として、子供が自由に書けるように作るのか、予め型を決めた形式にするか考えていく必要がある。 教師の発問も大切である。
C	「運動が簡単すぎる」や「行い方の工夫の余地がない」と自己評価しにくい。 かわりがあると自己評価しやすくなると考える。 教師の働きかけ、称賛や問いかけを大切に子供同士のかかわりにつなげていくこともできると考える。 比較することが大切だと考える。「友達と比べる」「過去の自分と比べる」「数値の変化を比べる」などICTと絡めて考えていくことが自己評価につながると考えた。
D	運動をやり込まないと課題が生まれないので、自己評価できないと考えた。 ICTを活用する上では、見る視点が大切。視点がないとICTを使って収集した情報を活用しきれない。見る力を育てることは大切。 学習では扱う運動が多いので、一つ一つの運動のポイントはここだよと働きかけるのは現実的に難しい。よって、普段の学習で得意な人の動きは何が違うのかという視点を他の領域を経験する上でも大切にしていける必要がある。このような学び方を経験していくことで、部位を意識した見方が育っていくと考えた。 自己評価する力を部会で捉えたと「自分に合った運動を選ぶ力」と置き換えると、手立てが変わってくるのではないかと考えた。

(6) 各グループの協議の報告を受けて

手立てとして、今年も運動例の開発、教師の働きかけ、ICTや学習カードの在り方が昨年度の研究と重なる考える。

運動をどのような視点で分析するのかということについては今までやってこなかったので、難しすぎた運動だとか、簡単すぎた運動だとか、もとの動きは今までのものでよかったのかなどもう一度考え直す必要がある。新しい運動例は考えてきたが、分析をしていく必要がある。

学習カードの在り方については、どんな項目が必要なのか考えていかなければいけない。

昨年度の3時間パックは自己評価するためには大切な働きかけであると考え一方で、枠を作ってしまうことが、子供を誘導してしまうことにもつながってしまうのではないかという考えもある。体育ノートの活用も考えられるのか、子供の思考を促すためには、項目がある学習カードが適しているのか検討は必要である。

PDCA サイクルや学び方に当てはめて、子供が「する」自己評価活動について考えていくことが必要であり、子供によっては、運動しながら自己評価していく姿も考えられる。

自己評価の力を高めるための手立てを自らの学習課題の解決のために学習課題を設定することなど焦点化していくことが大切り、部会として整理していく必要がある。

運動の捉え方の違いによっても自己評価の仕方は異なる。

学習の段階によっても自己評価の対象は異なってくるのではないかと考える。

2 先生方より

河野先生

自己評価を部会でどのように捉えているか、定義付けていく必要がある。仮に自己評価を「自分の取組、自分の運動を客観的に捉えて、よかったところやよくなかったところを把握して次の学習につなげていく活動」と捉えたとすると、次の学習につなげる自己評価をするためには、自己評価をしたいという動機付けが必要になる。

よって、一つ目に動機付けが必要である。

「自分の動きを客観的に捉える」ためには、メタ認知は欠かせない。さらに、次の学習の時間に生かしていくためには、自分で学習の見通しを立てたり課題を見いだしたりする力も必要になる。そして、学習方略も必要である。よって、動機付けを高め、学習方略を立てる力を高める、メタ認知を高めることが自己評価には必要だと感じた。

PDCA のそれぞれの場面に自己評価の場面があることに納得していて、課題を設定した時点でその課題は適切であったか考える場面、運動を行っているときでも自分の取組は自分の体力に適したものなのか考える場面、前回の課題が修正されているのか考える場面など、いろいろな自己評価の場面があるので今後整理していくとよいと考える。

唐澤先生

広く捉え、義務教育の学習指導要領のゴールは何かと考えたときに、目的は様々な課題がある中で未来を切り開く力の育成だと言われている。

中学校でのどんな授業結びつけていくかも考えていかなければいけない、そのためには教師達が教えていかなければいけない内容もある。そうしなければ、何が自己評価なのか分からない子も出てくる。教師が教える部分もあるし、見守る部分もある。

畠中先生

部会に多くの先生方に参加していただいていることが、今年の強みだと感じている。皆さんに意見を伝えていただき、部会の感想を共有してください。

3 次回

6月7日（火）18時30分～20時00分 北区立滝野川第五小学校
「実証授業①に向けて・・・授業内容 手立てについて」（専門委員会）